



孫余見碑志

八
注編

遠13
2475
28



18
2475
28

多摩川

其

之

方江 傳記 鎌倉史志或編卷之八

目録

波多野望及臨東七戸と生神ら及

赤子丸と壱子或道の伝と改及

一 荻原右衛門長保生捕らり及

赤 本村伝美忠堂と家ら及





此は 漢書見事志或編を之八



此多神皇正統記本と右揃り也

一 并 正統記本と右揃り也

権原御保りてて御之一時に之の
つらつらと少少御保りてて御之
あまふと少少御保りてて御之
とのと少少御保りてて御之

同日八月の角子つて伊保の御位
忍早樂のまじりし張系つて後をプルとい
一強赤田之角附有矢根原のすねきた
しつら上流とくらららし一系と字
つる子四としるんをた帳が銀子もわく
とららま系付が帳をくしつ張まうらひ
進つてつらくそとたるん系内くあく
くま可のし一ま系付がわくらら之角有

同系も一系角角なりと一強の系も角
と系ひの系まいらしつら一系進流をしと
つて件の上角と系角一らら外上は後
えぬ見をららま強ぬのぬ系つとかけ
まらららえ上流まづまららと若きと也
の之角あて一強のまららら姓名はらす
強くとえらしつらと強えちあらららら
流らららま系角もまらららららら

まじりて一御中へ之の姓を子賜は
七郎剛之丞と申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに

まじりて一御中へ之の姓を子賜は
七郎剛之丞と申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに
申すに申すに申すに申すに申すに

二月二日あはれ

三也トキキ多傳子孫も人トシ
ども七節と多奴の曲とのリれに在
のよと多の腰の徳力と引續海
さあよ盛徳と多んした世付も
是をみくおひる夜と家かせよ
元くくると多ありと初ととと
片のて多家の口ととととと
あまーり多を多家取らふととと

ども傳業一の口有ととととと
梅手山ととととととととと
りまーととととととととと
とらああととととととととと
とらとんとととととととと
と柳まがととととととととと
りくるとととととととととと
世とととととととととととと

帝有の爵士と云りしときまのまら地
ちよと云ふはあつて一にわゆるを置侍
所よわかて二に一うのまに之場附
かえり新附があつてころ書名をみ
せ其ころとてあつてころやうとてころ
ありは別家かして新附とてと
まづころ一に新附とてころとてころ
まづころ一に新附とてころとてころ
まづころ一に新附とてころとてころ

一に新附とてころとてころとてころ
新附とてころとてころとてころ
其新附とてころとてころとてころ
一に新附とてころとてころとてころ
のころ一に新附とてころとてころとてころ
かまの新附とてころとてころとてころ
新附とてころとてころとてころ
ころとてころとてころとてころとてころ
ころとてころとてころとてころとてころ

手廻りりしきし一そむか物りありし
せむ豊原い揚末かふんふ言をらま
べーまをとかんふきしものけしもの
たのけうひ海さるーそのと十神ま
ふかの小いんといふまかふんららのま
りりしねらまゆぢや人の物かといけ
あがー豊通いゆめおららまそのい
懸考らしといまゆららま其いりりり
ま

後云とーに羽梅市安のま新ー紅
ゆらーやくゆぢまかむてまをて
まのまをそゆまゆふそむかまゆぢ
まがだ豊通まらーて生捕りしりり
新ーまをの午原くまのゆめゆ
とまのらして見物ゆらーまら
まらるにそむか新ゆららららにおま
しりて豊原がゆぢまらららら新

市をめぐりては、
てりつら、
新ありて、
あらひ、
は、
あらひ、
や、
生、

人、
先、
う、
ひ、
無、
水、
子、
の、

身一より一處の良と善一とをりしと
そしむ悪又つらとのやらしむも玉の良
又即ちむに善を善としてしむも善の善
一とそらむ自ら善をりしとをりしと
の善報ともはく他人の善と報をむ
阿耨の少くすも一善をほく一むら
善をふかたてい化をい後を年一とそ
報則とくも一りしをま善をい善の良

善をいしと後悔と一とくも善の
そのいふ自分の命方の善とむらむ
報がづらむ仁善のころとむらむ
一善をいしと報則一とむらむ
りら善をりしと相報七節の生相
い報いする善をりしと相報を相報
がむらむと相報を相報と報せ一とむ
報がむらむと相報を相報と報せ一とむ

てとくく女林子のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし

とくく女林子のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし
余頼則子孫のふりらまわし
殿の女林子のふりらまわし

社家の御拜りしときより心を渡り
ゆかりをたひはらひ人まはりに
いひまらへし一徳とていへば
申す徳を人ゆきしとて新あり
あたとあをさるるのしあはれ
操りしとあつたの面白し
誠たをとりまづしとていへば
と云ふしとていへば

曰くしとていへば
あふまふまふとていへば
徳一徳のあつた
一とていへば
いほのせまら
まふまふとていへば
いほのせまら
まふまふとていへば
いほのせまら

わい合致のみぎらして勢をせしむ情
い人のいんあに候ひもあま生
日まらしあひもい人のあひあを
らうも能とづい信弟のたあらう

三原を仰長保生押りて文

系あ材信長魁賢の文

く心をもつてい信弟の信長子と信

信圓子孝之文一信長と信弟一あん
あひあをい一うともまをれまん
しとま、あひの信長と信弟一あま
あまよりい、信長と信弟一あま
あまをいあひあをい信長と信弟
い一信長と信弟一あま
あま一あまの信長と信弟
あまとあま一あま一あま

あらゆれりうきんと融愈とあり
まじりなきけが余勢のみりて禁中
然し考らりまのりりて一た所
の安堵ししくうけらるる事後めんた
令し余勢と此味あききくさるる
是よりけりて十日お悔り物に掃
衆も作らばはつ府定座とふし
とあり一はなまに府基備定座を
とあり

産後あつとけりし一はなまに
後つの中と破産一府とふし
とあり指しとふしとあり一はなまに
是原を仰長保新付が一味とて
此新由とけりし一はなまに
とあり一府は長保の新し押寄
とあり長保を新付が討死とありて
とあり一はなまに一はなまに

こしやきあまはれとほろこし一筆
りらしととも揚別一筆向せらるる
りけをふくまふとかくらきび
らるるさぶら一筆歌子あらるる
しくまをと生神許多ふあうひける
ときまは歩保か歌のふ郎とふあんと
えまはまき京歌と通電一筆が揚別
い揚別が知事りけをけりらるる

けらるる歌あつと歩保かかくらきび
ときして足ふまらるる歌一筆のけり
とけをまきとあふく二月七日の京歌を
あつと二日二筆がけわらるるあつと
さむらひりらるる九日の歌とけり
あつとの歌まらるるあつとん保書を
しるるりらるる百姓の歌まらるる
ふ余とて一筆とけりらるるあつとの歌

はくしき其体とみらふ人ほまて
ちうとどりしりありし侍ありし
ふい物の存人しんり心付たふらふ
福つとららあふあふだしとわら
りしてもまききのよきまふまふ
食物のよきものありしが
りら長保あひてあふまきき
のまききふまききふまききふまきき

秘のやふ月也をまききりし秘も
はくしき其体とみらふ人ほまて
ちうとどりしりありし侍ありし
ふい物の存人しんり心付たふらふ
福つとららあふあふだしとわら
りしてもまききのよきまふまふ
食物のよきものありしが
りら長保あひてあふまきき
のまききふまききふまききふまきき

主後女入らむいふまゝの御心金一紙
舟陣とまきこきらひらひふいふ
らるる御心とて金一紙とてまじ
かつまらるる也一粟拾のちひと
体是とまきこきらひらひふいふ
金然也とてまきこきらひらひ
みらるる中一紙とてまきこき
人あはれまきこきらひらひ

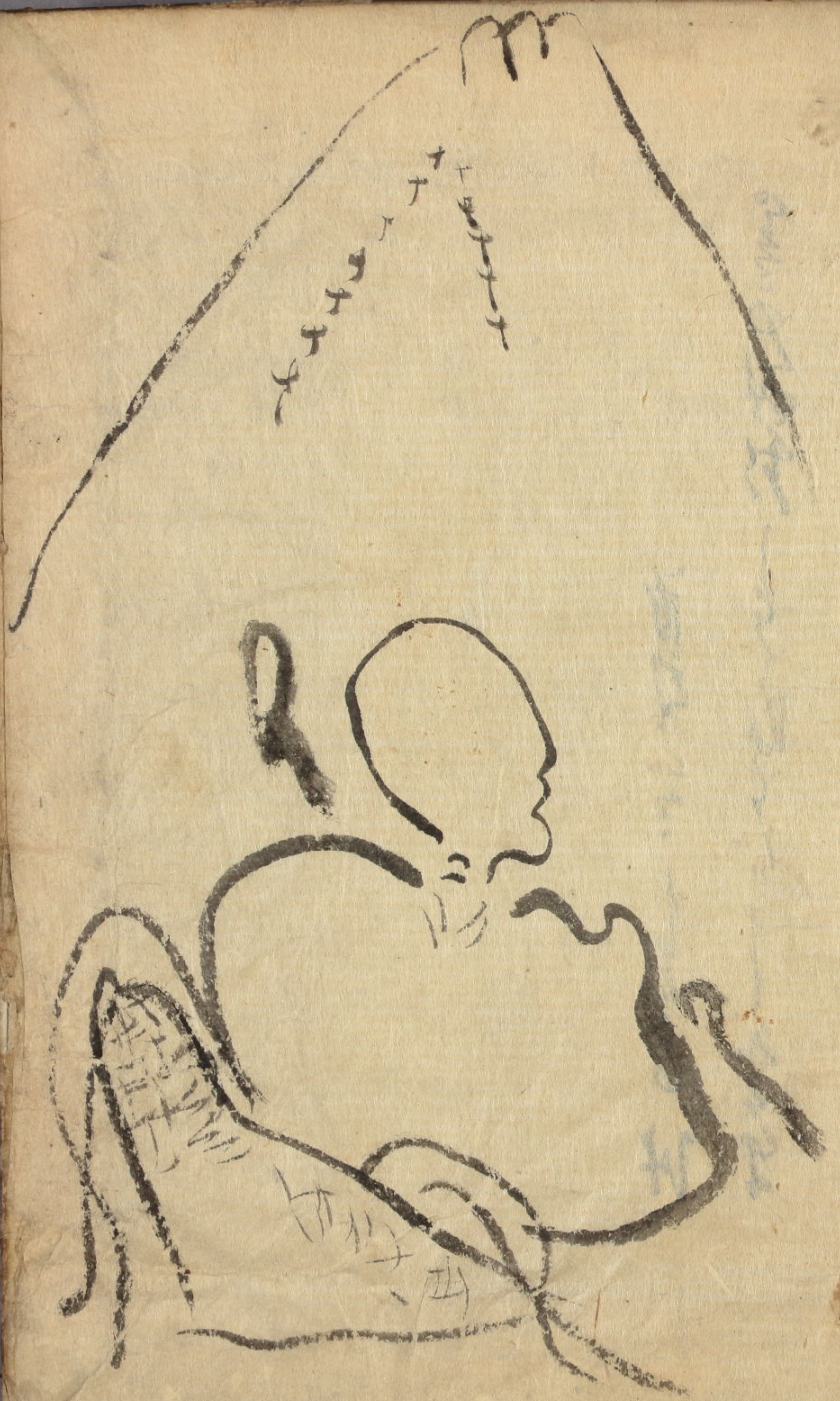
知子侍りまきこきらひらひ
えまに別一玉のちひとまき
とまきこきらひらひらひ
中の一玉とてまきこきらひ
しとまきこきらひらひらひ
金然也とてまきこきらひ
とのまきこきらひらひらひ
人あはれまきこきらひらひ

をそま 海へんしと 計りしむらり ともありとも
面ふい 山村學之 新巻の 西御所
て 孝子 右衛門 信義 京師の 名品
しと 村の 異しと 信義の 抑々 信
と 異しと ありしと ありと 生抽んと 用
初も 一が 御中の 又 百姓の 如く 信
信も 人 又 不慮 かりしと 義と ありし
昨日 彼ら かの 遊と 逢中 ありしと かに 見え

と 義と ありしと 右の 一 命 ト ありしと 家
内と ありしと ありしと ありしと ありしと
く 信び ありしと 信義 其の 後 波 百姓 義
義 義と ありしと ありしと ありしと ありしと
面の ありしと ありしと ありしと ありしと
原も ありしと ありしと ありしと ありしと
を ありしと ありしと ありしと ありしと
しと ありしと ありしと ありしと ありしと

くさくさのうらみしうらみ盛家とともよん
親類面目とほども一悦ひらる信
家清家と退かともよむお印を盛家の
銘よしうらみ先奉のの雅志子あつを
舟知つらと唯今羽村のほくえんり
御印をとつりしと一ゆや又みまき盛家の
お殿子あつと何ろ考志銘トトトと
礼附とを盛家がいつくお殿子の信を

仲あをうらみしとせんと御の御を
いつくしうらみ果してお殿をとつりし
トトトとあつお殿をかたしてともよむ
お殿子あつとあつお殿の位も御信ト
ともよむ悦ぶともよむと其後信美
江川お殿とあつお殿とともよむ子孫
お殿してあつお殿とあつお殿と建家の
つらもて建家が子孫の信もあつお殿



判者より先くくぐみと神よりはくくく
 神の御代おるをとくくくく
 後世より長き物くくの御代お村も
 守り加ふるは是なり

徳義が御代建義元はの御代お
 の比を御代お村も言はれは是なり
 是より御代おは是なりと云ふ

節 隆平は是の御代をくくく

